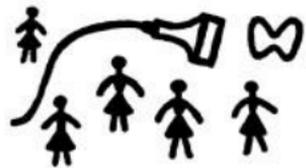


福島第1原発の事故から9年が経過した今、県民の被ばく量が非常に低いことが分かっています。しかし、子供の甲状腺がんが200人を超えて増えつづけています。もともと子供たちが持っていた「無害な」甲状腺がんを、精密な検査によって発見している「過剰診断」が起こっていると思われまます。

甲状腺がんの過剰診断は韓国でも問題になりました。予防医学を重視する韓国政府の方針で、乳がん、子宮頸(けい)がん、大腸がん、肝臓がんを対象にした政府主導のがん検診が1999年から始まりました。このとき、乳がん検診のオプションとして、3000~5000円程の追加

# がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

まると甲状腺がんの発見が増えました。2011年にはがん検診開始前の93年に比べて約15倍にまで増え、12年には女性のがんの約3分の1が甲状腺がんとなりました。甲状腺がんが女性に多い傾向は日本でも同じですが、甲状腺がんは女性のがんの3%にも満たない少数派です。

一方、韓国の甲状腺がんに

## 目的に沿う適切な検診を

料金を支払えば、超音波による甲状腺がん検診も受けられることになりました。

乳がん検診は専用のレントゲン撮影装置であるマンモグラフィーで実施するのが基本

です。しかし、韓国では、乳がん検診で超音波検査を使う医療機関も多く、そのついでに甲状腺も検査するというものです。

よる死亡率は、発見数の急増に反して、下がりませんでした。もともと、このがんで亡くなる人がほとんどいないからです。

しかし、韓国では、この「過

剰診断」に対する科学者の警鐘をテレビや新聞が大きく取りあげ、「アンチ過剰診断」キャンペーンといった動きが進みました。その結果、甲状腺がん検診の受診者数はピーク時から半減し、高齢化の要素も加味した「年齢調整罹患率」も激減しています。甲状腺がんの年齢調整罹患率は、ピークとなった12年は99年の12倍に上りましたが、16年ではピークの6割まで急降下しました。まさに、ジェットコースターのようなアップダウンです。

がん検診の目的はがんによる死亡を減らすこと。「早期発見」善「ではないということを韓国に学ぶべきでしょう。(東京大病院准教授)